シンポジウム記録 マアナゴ生活史研究の最前線と資源管理

II-2. 東京湾

岡部 久,¹ 斉田芳之,² 田島良博,³ 清水詢道⁴

¹神奈川県水産技術センター,

²横浜市漁業協同組合,

³神奈川県庁,

⁴元神奈川県水産技術センター

II-2. Tokyo Bay

KYUU OKABE,¹ YOSHIYUKI SAITA,²

YOSHIHIRO TAJIMA³ AND TAKAMICHI SHIMIZU⁴

¹Kanagawa Prefectural Fisheries Research Center, Miura, Kanagawa 238-0232, ²Yokohama City Fisheries Cooperative Association, Yokohama, Kanagawa 236-0012, ³Kanagawa Prefectural Government, Yokohama, Kanagawa 231-8588, ⁴Former Kanagawa Prefectural Fisheries Research Center, Miura, Kanagawa 238-0232, Japan

1. はじめに

近年、東京湾のマアナゴ漁業は漁獲の低迷が続いている。主力であるあなご筒漁業者による先進的な資源管理の取り組みにもかかわらず、シャコやマコガレイといった重要資源とともに衰退している。この現象は東京湾だけではなく、伊勢・三河湾や大阪湾などの内湾漁場でも時を同じくして起きている。本報告では、東京湾のマアナゴ漁業の変遷と、あなご筒漁業による資源管理の取り組みを通じて見たマアナゴ資源の現状を紹介し、資源管理の今後を展望する。

2. 漁業種類別漁獲量の変遷

神奈川県の東京湾漁業の一大拠点である横浜市漁協柴支所（小柴）のマアナゴ漁獲量は1990年代以降あなご筒漁業が主力となり、小型機船底びき網漁業（小底）と合わせると100トン以上の漁獲量を維持してきた。しかし1992年の248トンピークに減少し、近年では40-70トンと低迷している。特にあなご筒漁業の落ち込みが大きく、近年では、小底が筒を上回っている。その背景には、シャコ、マコガレイ資源の深刻な低迷があり、小底がマアナゴを狙う操業を行うようになった結果

である。

3. あなご筒漁業による資源管理の取り組みと今後

この漁獲量減少の過程で、漁業者の間に資源管理の必要性の認識が広がり、水産技術センターがサポートに入り、小型魚の保護を目的とした水抜き穴の拡大の取り組みが始まった。毎年9月以降に筒に入ってくる全長36cm未満の小型魚（メソ）を保護し、60-80%と高い漁獲率のマアナゴの翌年の漁を確保するものである。神奈川の漁業者が始めたこの取り組みは、2000年以降、千葉、東京の漁業者との交流をきっかけに東京湾全体に広がった。

漁業者による取り組みには水抜き穴拡大のほかに、年末のメソの分布量から翌年のマアナゴの漁況を予測する調査がある。両者の相関は比較的高く、今後も充実強化すべきである。近年のこの調査を通じて、かつては8月から12月に漁場に現れたメソが、年明けの1月から3月にまとまって漁獲される現象が見られた。田島、久保島¹⁾は、2000年代初頭を境に、小底の試験操業で採集されるエビ類、カニ類、ハゼ類といったマアナゴの餌として重要と考えられる小型の底生生物の減少を報告しているが、このことは、メソの出現時期の遅れが、餌不足による成長停滞の結果である可能性を示唆する。瀬戸内海はかでノリの色落ちの原因として問題となっている水質総量規制の影響が底生生物の減少にもつながっている可能性を、広域的に検討する必要がある。

小柴のシャコ漁が2016年から2年続けて自粛され、出荷枚数が0となったのに対し、マアナゴは低調ながらも漁獲され続けている。このことは、あなご筒漁業の水抜き穴の拡大による小型魚保護の効果の表れである可能性がある。今後は、目合いが小さい網を使うマアナゴ狙いの小底による小型魚保護の方策を検討する必要があるだろう。

文 献

- 1) 田島良博, 久保島康子. 東京湾生物相モニタリング調査(2) マアナゴ (*Conger myriaster*) の餌生物の動向について. 神奈川県水産技術センター研究報告 2013; 6: 25-33.